【研究ノート】

バルザックにおける動物表現 2

――『アデュー』と『砂漠の情熱』の場合――

沖久　真鈴

はじめに

バルザック作品の面白さと言えば、何と言っても鋭い観察に基づく人間描写である。「人間喜劇」には2000人を超える登場人物がおり、あらゆるタイプの人間がそれぞれ固有の生き様が立ち現れてくるかのように生き生きと描き出されている。しかし、その「人間喜劇」の根底を支えているのは実は「動物」なのでないだろうか。バルザックがどんなに動物に関心を寄せていたかは、1842年の「人間喜劇　総序」を見れば明らかであるからだ。それにはこう書かれている――

> この想念は、人間界と動物界とのあいだの比較から出てきたのであった。／（改行）ビュフォンが一冊の本によって動物学のすべてを書きあらわそうとして、あんな立派な著作を残した以上、「社会」についても同じ種類の著作が行われるべきではなかったか？
>
> （Avant-Propos de *la Comédie humaine* 1842.）(1)

18世紀の博物学者、ジョルジュ＝ルイ・ルクレール・ド・ビュフォン Georges-Louis Leclerc de Buffon（1707-1788）に多大な影響を受け、ビュフォンがあらゆる動物種を描き出して見せたように、バルザックも自らの小説の中であらゆる人間種を描いて見せようと試みた。それが「人間喜劇」の根本原理なのである。そうであればなおのこと、まずは、人間だけを問題にするのではなく、バルザックが初期に多用する動物と人間の比較に着目し、どのように動物が物語に登場し、物語展開や人物描写に関わっているのかをていねいに考察

してみるべきはないだろうか。ここで言う比較とは、とりわけ登場人物が動物にたとえられる比喩表現という比較のことであり、そうした比較が物語展開にどのように関与するのかが判明して初めて、バルザックが多用する動物と人間の比較の意義が解明されるだろう。

『アデュー』(1830)[2] と『砂漠の情熱』(1830)[3] は、「人間喜劇」のなかでもかなり初期に書かれた短編作品である。初期の段階ですでに多くの動物の比喩表現が見られるが、それらはどのように発生し変化していくのだろうか。そして動物と人間の関係性はどのように描かれているのだろうか。

1．なぜ動物への関心が高まったのだろうか

19世紀前半は、動物の時代と言っても過言ではないほど、動物への関心が高まった。1789年にフランス革命が勃発するや、民衆がヴェルサイユ宮に押しかけて王の動物園を略奪した。1792年に、動物たちは、死を目前にしたルイ16世の懇願により殺処分を免れて、パリ植物園に引き渡された。そして翌年1793年に、ジャルダン・デ・プラント（Jardin des Plantes）国立自然史博物館が誕生し、人々が柵ごしに動物を観察できるようになった。1789年のナポレオンのエジプト遠征の際には、ジャルダン・デ・プラントの初代館長であり博物学者のエティエンヌ・ジョフロワ・サンティレール Etienne Geoffroy Saint-Hilaire（1772-1844）も同行し、フランス本土には生息しない動物たちを記録し、本国に持ち帰った。これによってジャルダン・デ・プラント国立自然史博物館動物園は拡大した。さらに1827年、オスマン帝国総督ムハンマド・アリーからシャルル10世にキリンが贈呈され、船でマルセイユに到着したキリンは、パリまで５、６か月かけて約900キロの道のりを歩いて移動した。パリの街を歩くキリンの様子は人々の注目を集め、新聞雑誌の紙面をにぎわせた[4]。マリオン・マスによれば、とくに1820～30年の10年間は、世界は自然の支配から「野生の劇場」にとって代わった時代であるという[5]。気候風土の異なった土地から運んできた動物をパリの風土に馴化させたり、交配によって新しい品種を作り出したりすることに力が注がれ、「野生の劇場」つまり動物園が発展したのである。動物を観察し、飼いならす、ということがきわめて重要なテーマになったのである。

これに伴って1830年ごろからは新聞が労働者階級のことを、環境に適応させることのできない野蛮な存在だとして動物にたとえる記述が出始めた。また画家ウージェーヌ・ドラクロワ Eugène Delacroix（1798-1863）は、1830年前後からライオンやヒョウ、トラなどの猛獣を突如大量に描き始め、その数約400点にのぼる。そしてヴィクトル・ユゴー Victor Hugo（1802-1885）は1822～23年にかけて『アイスランドのハン』と、1825年には『ビュグ・ジャルガル』という人間／獣／動物を対峙させた物語を発表している。こうした時代背景のなか、人間性と動物性の越境のテーマや、人間と動物の接続・切断の関係性を、バルザックはどう描いたのだろうか。たとえば、そうした問題提起と少なからず関係がある、1830年に発表した二つの物語『アデュー』と『砂漠の情熱』を見てみよう。

２.『アデュー』あるいは動物化した人間が人間に戻るとき

『アデュー』の物語展開はこうである。1819年のある日、フィリップ男爵と友人のダルボン侯爵がカッサンへ向かう山道を歩いていたところ、修道院の館の前で一人の若い狂った女に出くわす。「アデュー（さようなら）！」としか言わないこの女を見たフィリップは「あれはステファニーだ！」と驚く。７年前、ナポレオン軍がロシア遠征で敗れた際、ベレジナ河を渡って追ってくるロシア軍から逃げようとしているとき、軍は疲弊し、寒さと飢えをしのぐため、仲間同士で略奪をする状況だった。そこで、フィリップは、馬車を襲われ途方に暮れていた幼馴染のステファニーと偶然出会う。そのとき河を渡る唯一の手段だった橋に狂乱状態の群集が押し寄せたため橋は崩れおち、群衆はパニックに陥いる。そこでフィリップは筏を作り、ステファニーを乗せ、河を渡らせる。彼女の「アデュー！」という言葉を聞いたのが最後、二人は別れ別れになってしまう。ステファニーはその後、二年間、軍に引きずり回され娼婦のように扱われたために気がふれてしまったということだった。７年ぶりに再会したステファニーは、もはやフィリップのことを恐れる動物のような女性になっていた。唯一彼女が心を許しているのは白痴のジュヌヴィエーヴという女だけである。フィリップはステファニーに砂糖を与えながら、手なずけようとするが効果がない

ので、農夫をたくさん集め、あのベレジナ河での押し寄せる群集をステファニーの前で再現するというショック療法を行った。すると怯えたステファニーの目は突然光を取戻し「フィリップなのね！」と叫び一瞬、覚醒するが、とたんに息絶えてしまった。

以上が『アデュー』の概要である。ステファニーはなぜ息絶えたのだろうか。人間扱いされずにまるで性的動物のような扱いを受け続けたために、もはや人間が信用できなくなり、人間社会にいながら人間社会から逃れるため、気がふれえざるをえなかった。だからこそ白痴のジュヌヴィエーヴだけが信用できていたが、気がふれたままではいられなくなったために死ぬよりほかなかったのだろうか。そうであるならば、いやそうであるからこそ、ステファニーは、自分が非人間化する始まりの情景を再現され、それを見たとき、一瞬だけ現実に戻り、「フィリップなのね！」と叫び一瞬、覚醒するが、とたんに息絶えるしかなかったのだろう。人間社会にいながら生きるために動物化していたが、人間に引き戻されてしまったからには、もはや生き延びる手段がなくなってしまう。ここには、人間と動物の境界が引かれているのだろうか。動物ならば生きていけるのに、なぜ人間は動物とは区別された人間として生きていかなければならないのだろうか。もともと人間とは、動物性と人間性の混合体なのではないだろうか。バルザックは、そうした微妙な境界あるいは混合体として生きる人間を観察し、人間喜劇という世界を築きたかったのではないだろうか。そうした問いに答えるのには、物語展開では十分ではない。エクリチュール écriture の働き具合を検証するしかない。とりわけ、ここで多用される動物比喩表現のレベルに焦点を当てて分析考察してみよう。

3．『アデュー』における動物比喩表現とは

登場人物の描写には、いったいどのような動物比喩表現が用いられているだろうか。まずは、登場人物ごとに分析してみよう。

3-1. ダルボン侯爵に関する動物比喩表現について

3-1-1. フィリップ男爵がダルボン侯爵にかけた言葉とは――

Haut le pied ! Saut, marquis ! là donc ! bien. Vous franchissez les sillons comme un véritable celf ! (p.973)
そら、足をあげて、そら飛んだ！そうそう侯爵殿なかなかうまいもんだ。まるで鹿が畝溝を跳び越すようだな。

侯爵が飛ぶとき、鹿にたとえられる。侯爵は鹿ではないが、やり方しだいで一瞬鹿のようになれるのだ。

3-1-2. そして、ダルボン侯爵はウサギのようになる――

Bah ! au lieu de nous amuser, vous m'avaz fait courir comme un lévrier depuis quatre heures du matin, et nous n'avons eu pour tout déjeuner que deux tasses de lait ! (p.975)
ちぇ！楽しみになるどころか君は僕を朝の 4 時からまるでウサギみたいに駆けずりまわらせておいて、朝の食事と言ったらたった牛乳 2 杯！

侯爵は忙しく、従順なウサギのように餌を探して駆けずりまわり、その褒美が牛乳 2 杯とは、まるでウサギになれと言わんばかりだ。

3 -1-3. 大佐はカササギのようになる――

Quelques mèches de cheveux, mélangées de noir et de blanc comme l'aile d'une pie, s'échappaient de dessous la casquette du colonel. (p.975)
大佐の帽子の下からは、カササギの羽のような白黒班の髪の束が覗いていた。

ひょっとしたら大佐は、カササギぐらいには賢いのかもしれない。しかし、実際は違うと言うのだろうか。これらの直喩からすでに大佐のお人よしぶりや脳天気ぶりがうかがわれる。直喩は、漠然とした定義なので、タルボン侯爵のお人よしぶりや脳天気ぶりを納得してもらうにはここではうまく機能しているようだ。

3-2. ジュヌヴィエーヴに関する動物比喩表現について

3-2-1. ジュヌヴィエーヴは愛らしい小動物なのか――

En ce moment, les deux chasseurs entendirent un cri assez semblable à celui d'une souris prise au piège. (p.979)
この時二人の狩猟家は、罠にかかったネズミのような叫びを耳にした。

ジュヌヴィエーヴは罠にかかったネズミのような叫びをあげるしかなかったのだ。ネズミではないが、人間ではいられないためネズミを演じるしかないのだ。

3-2-2. ジュヌヴィエーヴの口は人間の口ではないのか――

> Enfin, sa bouche était contournée de manière à laisser des dents mal rangées, mais aussi blanches que celles d'un chien. (p.980)
> そして彼女の口はまくれ上がっていてそこに歯並びの悪い、だが犬のような白い歯がむき出していた。

ジュヌヴィエーヴは、身体までもが非人間化していて、白い歯をむき出して獰猛な犬のように抵抗するしかないのだ。そこまで人間世界とは無縁に生きているのだ。

3-2-3. ジュヌヴィエーヴの口はやはり人間の口ではないのか――

> À ces questions et à une foule d'autres que lui adressèrent successivement les deux amis, elle ne répondit que par des grognements gutturaux qui semblaient appartenir plus à l'animal qu'à la créature humaine. (p.980)
> こうした質問や、また二人の連れが矢継ぎ早に問いかけるほかの質問に、彼女はただ喉の奥をゴロゴロ鳴らして答えるだけだった。そのつぶやきは人間のものというより動物のそれに似ているようだった。

ジュヌヴィエーヴは、可能なかぎり人間から遠ざかった身体になっており、人間には理解できない振る舞いをする動物そっくりなのだ。

3-2-4. ジュヌヴィエーヴの口はもはや言葉を話せなくなったのか――

> Elle glapit, grogna, gloussa, mais elle ne parla plus. (p.981)
> 彼女は金切り声をあげたり、ブツブツ言ったり、クックと雌鶏のように鳴いたりするだけで決して言葉を話さなかった。

ジュヌヴィエーヴは、通常の人間には理解できない金切り声や動物的な鳴き声しか発しないほど白痴化してしまっているのだ。

3-3. ステファニーに関する動物比喩表現について

3-3-1. ステファニーは機械仕掛けの動物なのか――

Son geste avait d'ailleurs, comme celui d'un animal, cette admirable sécurité de mécanisme dont la prestesse pouvait paraître un prodige dans une femme.（p.981）
彼女の動作はさらに、動物の動作のようで、惜しげもない機敏さが一女性のうちに立ち現れたかのような、見事なまで正確無比なそんな機械仕掛けになっていた。

ステファニーはもはや人間的な緩さを残していないほど、機械仕掛けの動物のように隙がないのだ。そうしなければ彼女は生きていけないのだろう。

3-3-2. ステファニーは小鳥なのかリスなのか――

Les deux chasseurs étonnés la virent sauter sur une branche de pommier et s'y attacher avec la légèreté d'un oiseau. Elle y saisit des fruits, les mangea, puis se laissa tomber à terre avec la gracieuse mollesse qu'on admire chez les écureuils.（p.981）
二人の狩猟家は、彼女がリンゴの木の枝に飛びついて小鳥の軽やかさでその枝の上に乗っているのに驚いた。彼女は果実をもいで食べ、それからリスに見られる愛くるしい身ごなしで下に滑り落ちた。

ステファニーの身のこなし方は、小鳥やリスに等しい。その軽やかさや愛くるしさは人間業ではなく、その自然さに語り手は驚嘆しているのだ。

3-3-3. ステファニーは日向ぼっこをする猫になり耳を立てる犬になる――

Puis, tout à coup, elle jeta ses pieds et ses mains en avant, resta étendue sur l'herbe avec abandon, la grâce, le naturel d'une jeune chatte endormie au soleil. Le tonnerre ayant grondé dans le lointain, elle se retourna subitement, et se mit à quatre pattes avec la miraculeuse adresse d'un chien qui entend venir un étranger.（p.982）
突然足と手を前に伸ばして日向ぼっこをして眠る猫のような自然さ、さやしい姿、身を投げ出した心安さで草の上に寝そべった。遠くで雷の音が聞こえた。彼女は素早く後ろを振り返り、誰か知らない人が来るのを耳にした犬の驚くほどのすばしこさで、四つん這いになった。

ステファニーは、次第に愛される小動物やペットのように人を安心させる振る舞いをする。自身も安心し、動物固有の本能のままだ。彼女はもはや人間には戻れないだろう。

3-3-4. ステファニーのすばしっこさは牝鹿並か――

[...] cette femme qui, en apercevant les deux amis, accourut en quelques bonds à la grille avec la légèreté d'une biche. (p.982)
女はこの二人の友人に気付くと、まるで牝鹿のようにすばしこくピョンピョンはねて鉄柵のところに駆け寄ってきた。

ステファニーは牝鹿のすばしっこさと人なつこさを示す。人間は敵ではないのか。

3-3-5. ステファニーは一度危険に気づくと、逃げ回る――

Au bruit de la détonation, l'inconnue, qui était restée immobile, s'enfuit avec la rapidité d'une flèche, jeta des cris d'effroi comme un animal blessé, et tournoya sur la prairie en donnant les marques d'une terreur profonde. (p.983)
鉄砲の音に今までじっとしていた女はまるで矢のような早さで逃げ出し、傷ついた動物のような怯えた叫び声をあげ、底知れぬ恐怖に襲われたもののように牧場をぐるぐる駆け巡った。

ステファニーは、鉄砲が狩りのためと気がつけば、自分もその獲物なのだと分かる。自分より強い動物には、怯え、逃げるしかない。

3-3-6. ステファニーは動物扱いしかされない――

[...] tantôt gardée dans les hôpitaux, tantôt chassée comme un animal. (p.1001)
あるときは施設病院に保護されたかと思うと、あるときは動物のように追い出されたのです。

ステファニーはそうなって当然だし、少しも不自然ではない。

3-3-7. ステファニーが動物に変化している様子――

M. d'Albon frissonna en voyant l'abandon du corps et la nonchalance animale qui trahissait chez la comtesse une complète absence de l'âme. (p.1003)
ダルボン氏は、伯爵夫人に魂が完全になくなっていることを示しているこうした投げやりな恰好、動物的な無頓着さを見てぞっとした。

かつては伯爵夫人であったステファニーがもはや恥じらいを無くしているコントラストが浮き彫りにされている。

3-3-8. 優雅で無防備な様子――

> Son corps gisait élégamment posé comme celui d'une biche. (p.1004)
> 彼女の体は牝鹿のそれのように優雅に横たわっていた。

優雅だがその肢体をさらす、知性の感じられない無頓着さが表現されている。

3-3-9. 人間の言葉を忘れたらどうなるか――

> Puis, elle jeta ce petit cri d'oiseau effarouché que déjà le colonel avait entendu près de la grille où la comtesse était apparue à M. d'Albon pour la première fois. (p.1005)
> それからあの怯えた鳥のような小さな叫び声をあげた。この叫び声は大佐がすでに、あの鉄柵の所で伯爵夫人がはじめてダルボン氏の前に現れた時に聞いたものだった。

ダルボンとフィリップには理解できない叫びである。言葉の壁ができ、コミュニケーションが不可能であり、ここに人間と動物の境界線が置かれている。同じ人間のはずだが、この境を置くことで相容れない存在、動物として描かれている。

3-3-10. 彼女の眼は、人間を見慣れない野生動物かのようである――

> Enfin, elle grimpa sur un faux ébénier, se nicha dans la houppe verte de cet arbre, et se mit à regarder l'étranger avec l'attention du plus curieux de tous les rossignols de la forêt. (p.1005)
> ついに彼女はキングサリの木によじ登り、頂きの緑の茂みの中にかくれてしまった。そして森の中の一番好奇心の強い鶯のような注意深い眼で、この見知らぬ男を見まわしはじめた。

鳥のなかでも眼がよく、遠くの獲物を見つけ仕留めることができるという鶯の眼にたとえられている。それほどまでによく見ても、かつての幼馴染を認識できないという皮肉である。

3-3-11. 言葉をつぶやくが、意味をなさない――

C'était l'impassibilité de l'oiseau sifflant son air.（p.1005）
それは鳥が鳴くような無感覚な仕草だった。

コミュニケーションがとれないことの例のひとつである。

3-3-12.　ステファニーはフィリップのペットなのか――

Elle regardait le sucre et détournait la tête alternativement, comme ces malheureux chiens à qui leurs maîtres défendent de toucher à un mets avant qu'on ait dit une des dernières lettres de l'alphabet qu'on récite lentement.（p.1006）
彼女は交互に、砂糖をじっと見つめたり、頭をよそにそらしたりした。ちょうど主人がゆっくりいうアルファベットが終わるまで食べ物に触れることを禁じられているあのかわいそうな犬のように。

ステファニーを飼いならそうとするフィリップとの構図が見て取れる。人間に戻そうとするのではなく、むしろ野生動物として見ており、それを扱い、飼い馴らそうとしている態度ではないだろうか。

3-3-13.　しかし、そうはいえステファニーは動物ではない。

Mais, dit-il en l'asseyant sur ses genoux, tu es heureuse, rien ne te gêne; tu vis comme l'oiseau, comme le daim.（p.1008）
「だが」と彼は彼女を膝の上に乗せていった。「お前は幸福だよ。お前には窮屈なことなんかないものね。お前は小鳥のように、鹿のように生きているものね。」

直喩 comme を用い、動物「のように」生きているのであって、そのものであるわけではないことが示されている。

3-3-14.　ステファニーに記憶が戻ったと勘違いし喜ぶフィリップが一気に地に落とされる。

14. Il avait donc pris pour une pensée humaine ce degré de raison que suppose la malice du singe. Philippe perdit connaissance.（p.1009）
彼は猿のいたずらほどの理性を、人間の思考ととっていたのだった。フリップは気を失った。

人間に似ているけれど、人間ではない猿を用いて、人間と動物の境界の曖昧

さと同時に明確な断絶を示している。

3-3-15. ステファニーが人間に戻るとき――

> Pendant un instant aussi rapide que l'éclair, ses yeux eurent la lucidité dépourvue d'intelligence que nous admirons dans l'œil éclatant des oiseaux.（p.1012）
> 稲妻ほど一瞬のうちに、鳥の輝く眼の中に我々がみとめる、理性はないが、明晰さを彼女の眼は持ったのだ。

動物には明晰さはあるが理性はないということか。それが人間と動物の境だとしているならばステファニーの境界が揺らいでいることが見て取れる。

４．『アデュー』における比喩表現と物語展開の関係について

登場人物たちが動物にたとえられた回数は以下の通り。ダルボン侯爵３回（鹿１、ウサギ１、カササギ１）、ジュヌヴィエーヴ４回（ネズミ１、犬１、動物１、雌鶏１）、ステファニー18回（動物４、鳥５、リス１、猫１、犬２、鹿３、鷲１、猿１）である。例文を見てみると comme「～のような」を使った直喩表現が多いことが分かる。また登場人物の容姿や、声や、行動を、そのつど様々な動物にたとえているに過ぎず、物語展開にかかわる特定の役割や意味は動物比喩に持たせていないように思われる。物語のヒロインであり、狂気の女性であるステファニーにとりわけ動物比喩が多く見られるが、男性の登場人物も、その容姿や行動が動物比喩によって表現されている。ステファニーは人間性を失い動物化した女性だが、割り当てられた動物を見てみるとどれもかわいらしく愛らしい動物であり、動物に「成り下がってしまった」というよりはむしろポジティブな印象を受ける。実際、物語の中で何度もステファニーは「この魅力的な生き物」（Cette charmante créature）と表現される。バルザックは「愚かな」「馬鹿な」という意味で動物のたとえを用いているのではない。その証拠に1833年「歩き方の理論」のなかで、動物の動きがあんなにもしなやかで無駄がなく美しいのにひきかえ、人間は歩き方でさえどうしてこんなにもぎこちないのか、と言及し「人間は退化した動物である」と言っている[(6)]。もう一つ、比喩以外に着目すべきことはフィリップと動物化したステファニーとの関係性

である。作中には apprivoiser「飼い馴らす」という言葉がたびたび使われる。例えば、

> Il eut le courage d'apprivoiser Stéphanie, en lui choisissant des friandises [...] il sut si bien graduer les modestes conquêtes qu'il voulait faire sur l'instinct de sa maîtresse, ce dernier lambeau de son intelligence, qu'il parvint à la rendre plus *privée* qu'elle ne l'avait jamais été. (p.1007)
> 彼は砂糖菓子を選びながらステファニーを馴らそうとする勇気があった。(……) 彼は恋人の本能、すなわち彼女の理解力の最後の一片に対して控えめな征服を徐々にやっていく術を心得ていたので、ついに彼女をこれまでになく≪馴らす≫ことができた。

また口笛を吹くとステファニーがやってくるように仕込む場面もある。警戒心の強い野生動物に餌を与えながら徐々に飼い馴らし、やがて芸を覚えさせるような、まるで動物園の飼育員と動物のような関係性である。読者は、動物園の観客同様、このスペクタクルが成功するのかどうか、固唾をのんで見守ることになる。しかし、最後、ステファニーはショック療法によって一瞬人間の知性を取り戻すが、そのとたんに死んでしまう。動物の直喩表現を用いることで動物化した人間を生き生きと描きながら、あくまで動物は動物であり人間は人間であるという距離感も直喩がうまく表現しているのではないだろうか。

5.『砂漠の情熱』あるいは人間化した動物

では次に、『アデュー』と同じ年に発表された『砂漠の情熱』について考察していこう。物語展開はこうである。

パリの見世物小屋で、動物のショーをみた女性が、どうしたらあんなに動物を飼い馴らすことができるのかと語り手に問いかけると、語り手は、ある兵士から聞いた体験談を彼女に聞かせる。その兵士は、ナポレオンのエジプト遠征の際、アラビア人の捕虜になったが、隙を見て敵の馬を盗み、逃亡に成功する。しかし、砂漠の途中で馬が息絶え、彼は歩いてようやく洞窟をみつけ、そこに身を潜め寝入ってしまった。真夜中に彼が目を覚ますと、暗闇の中、二つの瞳が光り、すぐそばにヒョウがいるのに気が付いた。殺そうと思ったが殺し損ね

た時のことを恐れているうちに、とうとう朝を迎える。ヒョウの口には血がついていて、どうやら兵士の乗ってきた馬を食べ、満腹の様子である。ヒョウは雌で、彼が用心しながら愛撫してやると気持ちよさそうにし、どんどん懐いていく。彼はその雌ヒョウに昔の恋人のあだ名であったミニョンヌという名を付けた。ある夜、兵士が流砂に飲み込まれ死を覚悟したときミニョンヌが飛んできて彼を流砂から引き揚げてくれた。以来、兵士と雌ヒョウは奇妙な愛情で結ばれともに暮らすが、ある日ふいにミニョンヌがじゃれて兵士の腿に歯を立て、それを勘違いした兵士は、とっさにミニョンヌの首に短剣を刺し殺してしまった。兵士はその後も後悔にさいなまれて生きている。

以上が『砂漠の情熱』の概要である。人間と動物が本来の境界を越えて愛しあっていたはずなのに、動物の愛情表現を熟知しえなかった兵士は、その噛みつくという行為を自分が襲われたと解釈したのである。人間は、極限状態にあっても人間は人間で、動物は動物であという境界が明示されたのだろうか。

６．『砂漠の情熱』における動物比喩表現とは

この物語において動物にたとえられているのは、まさに野生の雌ヒョウ、ミニョンヌだけである。この雌ヒョウがどのような動物にたとえられているのだろうか。

6-1.　ミニョンヌは雌ヒョウであるだけではない――

> Ce lion d'Egypte dormait, roule comme un gros chien, paisible possesseur d'une niche somptueuse à la porte d'un hôtel. (p.1224)
> このエジプトのライオンは、どこか邸宅の戸口に豪華なねぐらをもらって悠然としている大型犬のように、体を丸めて眠っていた。

この雌ヒョウが体を丸めて眠る様子は、ライオンや犬の眠る様子と同じなのだ。四つ足動物はみな同じように眠るのだ。

6-2.　ミニョンヌは雌ヒョウであるだけではない――

> Cette tranquille et redoutable hôtesse ronflait dans une pose aussi gracieuse que celle d'une chatte couchée sur le coussin d'une ottomane. (p.1224)

物静かだが恐ろしいこの主は、トルコ長椅子のクッションに寝そべった雌ネコに負けず劣らず優美な姿勢をしていびきをかいていた。

ミニョンヌは一度眠ると、安心しきった飼い猫のようにぐっすり眠る。しかも優美なのだ。物静かな恐ろしさと優美さの共存は猫類特有なものなのだろう。

6-3. 兵士は雌ヒョウ、ミニョンヌとのつがいになったか——

La panthère le laisse bien partir, mais quand il eut gravi la colline, elle bondit avec la légèreté des moineaux sautant d'une branche à une autre, et vint se frotter contre les jambes du soldat en faisant gros dos à la manière des chattes. (p.1226)
雌ヒョウはそのまま行かせてくれたが、彼が丘の上によじ登ったかと思うと、たちまち、枝から枝へと飛び移る雀のような軽やかさで飛躍し、雌ネコのように背を丸めて兵士の足に体をこすりつけてきた。

雌ヒョウ、ミニョンヌは兵士を敵とは見ていない。まるでつがいの相手のようだ。それに対して兵士の反応はどうだろうか。

6-4. 雌ヒョウは兵士、主人の動きが気になってしかたがない——

la panthère [...] ressemblant ainsi moins à un chien fidèle qu'à un gros angora inquiet de tout, même des mouvements de son maître. (p.1227)
雌ヒョウは、忠犬というよりも、あらゆることが、主人の身動きさえもが気になってたまらない大きなアンゴラネコを彷彿とさせる。

雌ヒョウは忠犬ではなく、つがいの相手を気にする猫なのだ。それゆえ、相手は自分の監視域から出てはならないのだ。

6-5. 雌ヒョウは兵士、主人との身体的応答を求め続ける——

Elle joua comme un jeune chien joue avec son maître, se laissant rouler, battre et flatter tour à tour (p.1229)
雌ヒョウは子犬が主人にじゃれるようにたわむれた。次から次へと転げまわされたり、叩かれたり、撫でられたりしてもなすがままだった。

雌ヒョウは兵士、主人との関係はつがいそのものだ。人間的振る舞いは無用なのだ。

6-6. 雌ヒョウは兵士をつがい相手と見るが、兵士は――

6. Ses yeux pleins de mollesse se tournèrent avec encore plus de douceur que la veille sur le Provençal, qui lui parlait comme à un animal domestique. (p.1229)
柔和さに満ちた両目は昨日よりもまたひときわ優しさを増してプロヴァンス男に向けられたが、そうなるとこちらはまるでペットにでも言うかのように話しかけるのだった。

雌ヒョウは兵士をつがい相手と見るが、兵士は雌ヒョウをペット見なしているのだ。

７．『砂漠の情熱』における比喩表現と物語展開について

この物語には、本物の野生動物が登場する。彼らのテリトリーに誤って入ってしまい遭遇した人間の話だ。本物の野生動物と人間との対峙は、どのように描かれているだろうか。まずは比喩表現を見てみたい。雌ヒョウ、ミニョンヌにも動物の比喩が用いられており、計６回（犬２、猫２、雀１、ペット１）となっている。割り当てられた動物は、愛らしく危険な印象が薄い小動物たちである。また面白いことに、人間の女性にも多く例えられている――

Puis, par un mouvement aussi doux, aussi amoureux que s'il avait voulu caresser la plus jolie femme, il lui passa la main sur tout le corps, de la tête à la queue, en irritant avec ses ongles les flexibles vertèbres qui partageaient le dos jaune de la panthère. (p.1226)
それから一番かわいい女を愛撫しようと思った時と同じ位、優しく愛情たっぷりの仕草で、雌ヒョウの体中を頭からしっぽまで、背中の黄色い部分を二分するしなやかな脊椎を、爪を立てて刺激を与えながら手で撫でた。

Le Provençal, comprenant l'importance de ses caresses, les redoubla de manière à étourdir, à stupéfier cette courtisane impérieuse. (p.1226)
プロヴァンス男は、撫でてやるのがどんなに大事かが分かっていて、この女王然とした娼婦がうっとりと無感覚になるくらい、せっせと愛撫をくりかえした。

《C'est comme une petite maîtresse ! ...》, pensa le Français en la voyant se rouler et faire les mouvements les plus doux et les plus coquets.
「まるで恋人みたいだ！・・・」雌ヒョウが転がり、これ以上ないほどゆったりと媚びたしぐさをするのを見て、フランス兵は思った。

Ce souvenir de son jeune âge lui suggéra d'essayer de faire répondre à ce nom la jeune panthère de laquelle il admirait, maintenant avec moins d'effroi, l'agilité, la grâce et la mollesse. (p.1228)
彼は若いころの思い出があったので、若い雌ヒョウをあだ名で呼んだら反応するようにしてやろうと思い立った。今では前ほどヒョウが怖くなくなっているだけにその機敏さ、優雅さ、しなやかさに目を見張るばかりだった。

このように兵士が雌ヒョウを人間の女性に見立てて扱い、昔の恋人のあだ名を付けて呼んでいる。他にも雌ヒョウは「砂漠のトルコ王妃」「獰猛なお姫様」「孤独な女王」などとも表現されている。兵士はこの野生動物の中に女性を見出すのである。そして『アデュー』同様手なずけ飼い馴らそうとしている。

Il conçut le fol espoir de faire bon ménage avec la panthère pendant toute la journée, en ne négligeant aucun moyen de l'apprivoiser et de se concilier ses bonnes grâces. (p.1227)
彼は、あらゆる手段を尽くして相手を手なずけ、気に入ってもらい、その日はずっと仲良くやっていけたらとおもった。

かわいらしい動物たちにたとえられ、人間の女性のように扱われ兵士によってだんだん飼い馴らされる雌ヒョウは、その危険性が希薄になっていくように思われる。そしてまた読者は『アデュー』同様、人間が動物を飼い馴らす、あるいは野性動物と心を通わせる、というスペクタクルに期待するが、突然雌ヒョウが兵士の足に噛みつき、その野生性に危険を覚えた兵士が思わず刺殺してしまう、という結末を迎える。『アデュー』が動物化した人間の話だとすれば『砂漠の情熱』は人間化した動物の話だということができるだろうか。しかしやはりこの物語でも人間は人間であり動物は動物なのである。

ところで、もう一つ着目すべきなのは雌ヒョウの記述にバルザックの博物学的観察の視点が見られることである。いくつか見てみよう——

1．Il se dressa sur son séant, et le silence profond qui régnait lui permit de reconnaître l'accent alternatif d'une respiration dont la sauvage énergie ne pouvait appartenir à une créature humaine.
半身を起こすと、辺りを支配していた静寂のおかげで吸ったり吐いたりする音が聞こえたが、その野生的なエネルギーは人間のものであるはずがなかった。(p.1223)

2．Une odeur aussi forte que celle exhalée par les renards, mais plus pénétrante, plus grave pour ainsi dire, remplissait la grotte.
狐が放つのと同じくらい強烈なにおい、いや、それ以上にきつく、いうなればもっとずっしりとくる匂いが穴の中にみなぎっていた。(p.1223)

3．La fourrure du ventre et des cuisses étincelait de blancheur. Plusieurs petites taches, semblables à du velours, formaient de jolis bracelets autour des pattes. La queue musculeuse était également blanche, mais terminée par des anneaux noirs. Le dessus doux, portait ces mouchetures caractéristiques, nuancées en for,e de roses qui servent à distinguer les panthères des autres espèces de *felis*.
腹部と腿の毛並みは輝くばかりに白かった。ビロードと見紛いそうな小さな斑紋が足にきれいな飾り輪をいくつも描き出していた。筋肉の発達した尾もおなじように白かったが、先には黒い輪の模様がいくつもついていた。背中の毛並みはくすんだ金のような黄色だが、いかにもつやつやで柔らかく、ヒョウをほかのネコ科の動物から区別するのに役立つ、濃淡のあるバラの花柄という、あの特徴的な斑紋がいくつもついていた。(p.1224)

4．[...] elle avait trois pieds de hauteur et quatre pieds de longuere, sans y comprendre la queue. Cette arme puissantes, ronde comme un gourdin, était haute de près de trois pieds. La tête, aussi grosse que celle d'une lionne, se distinguait par une rare expression de finesse; la froide cruauté des tigres y dominait bien.
体高は 3 ピエ、体長は尾を入れずに 4 ピエあったからこの種のものでは間違いなくもっとも見事な個体のひとつだった。こん棒のように丸くて強力な武器となる尾は 3 ピエもあった。頭は雌ライオンなみの大きさだが、わずかばかり繊細な表情のあるところが違っていた。虎のような酷薄な残忍さはなるほど、際立っていた。(p.1227)

5．Il monta sur la colline, et dans le lointain, il l'aperçut accourant par bonds, suivant l'habitude de ces animaux auxquels la course est interdite par l'extrême flexibilité de leur colonne vertébrale.

丘に登ると遠くのほうから、脊柱が極度にしなやかなために走ることができないこの種の動物の習性通り、飛び跳ねながらやってくるのが目に入った。(p.1229)

以上のように、バルザックがジャルダン・デ・プラントで実際にヒョウを観察したかのようにかなり博物学的に観察され描写されている。バルザックの動物への関心が窺えると同時に野生動物と人間を対峙させて、野生動物との関係性を描きたいというバルザックの思いが伝わってくるのではいないだろうか。

8．まとめ

1830年に発表された『アデュー』と『砂漠の情熱』はともに動物と人間を対峙させた物語である。一つは、動物のようになった女性の話であり、もう一方は実際に野生動物と出会う話であるため並列に比較することは難しいが、どちらにも共通しているのは、人間と動物を対峙させながらも相いれないものとして描いている点ではないだろうか。どちらの話も最後は死という結末によって断絶されている。どんなに人間が動物のようになろうとも、どんなに動物が人間のようになろうとも、人間は人間であり、動物は動物である、というスタンスだ。それはこの時代人々が熱狂した動物園の仕組みと似ている。檻の向こう側の野生動物を、安全なところから観察したい、できればもう少し近づいてみたい、という欲求があるが、その柵を超えた者には死が待っているという構図だ。バルザックの動物への興味は晩年まで見ることができるが、その動物の登場の仕方は変わっていく。今回の二作品では comme を使った直喩表現が多く見られたが、1835年の『ゴリオ爺さん』『谷間の百合』になると、ほとんどが隠喩表現に変わる。また、舞台も森の中や砂漠といった非日常の自然空間から、パリの街や社交界に移る。登場人物たちが隠喩表現によって動物と一体化し、日常空間へと入り込んでいくのである。この初期の作品にみられたように人間性と動物性を対峙させぶつけ合って比較するスタイルから、もっと動物性を巧みに人間の中に潜ませ垣間見せる、とうスタイルに変わっていくのだ。よって、登場人物の性格や行動を表現するために、よりたとえられる動物は種類を増すし、その重要度も上がっていく。さらに『アデュー』においてステファニーが「この魅力的な生き物」(Cette char-

mante créature）と表現されているのも面白い。人間から、動物に近づいたとき「魅力的な生き物」となるのに対し、バルザック最晩年の作品『従妹ベット』において、幾人かの登場人物は「この怪物」（Ce monstre）と表現されている。この動物ではない monstre という存在をどのように解釈すべきか悩ましいところだが、もしかすると放蕩や復讐に明け暮れ自らの種、家族を崩壊させてしまう、決して動物種がしない人間種特有ともいえる行為を繰り返す人間らしい人間たちのことを指しているのかもしれない。今回みた初期の 2 作品でバルザックが人間と動物の境界線を探ろうとした試みが読み取れた。また動物性とは何か、人間性とは何か、という問題も提起している。ここから晩年の作品まで、その問題がどのような形であらわれていくのかを他の作品でもていねいに分析していきたい。また『砂漠の情熱』における雌ヒョウ、ミニョンヌとイメージが重ねて語られる『金色の眼の娘』（1833-1835）のパキータとの類似をみていきながらヒョウ、あるいはネコ科の動物に例えられる登場人物を追っていきたい。ネコ科の動物はどのような登場人物と重ねられ、どんなイメージがあてられているのだろうか。その二面性あるいは多面性を示せるか試みたい。

註

（1） *Œuvres complètes de H. de Balzac*, Paris, A. Houssiaux, 1855, t.1, p.17.

（2） Honoré de Balzac, *Adieu*, édittion publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1976-1981, vol.4. 以下、この作品の引用はこの版による。

（3） Honoré de Balzac, *La passion dans le désert*, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1976-1981, vol.6. 以下、この作品の引用はこの版による。

（4） マイケル・アリン『パリが愛したキリン』（椋田直子訳）、翔泳社、1999年。

（5） Marion Mas,《*L'animal et la bête: frontières de l'humanité sociale chez Balzac et Hugo entre 1820 et 1830*》, *Equipe du XIXe siècle*, Paule Petitier. Nov 2007, Paris, France. Université Paris 7-Denis Diderot, pp.125-135, 2010.

（6） Honoré de Balzac, *Théorie de la démarche*, La Pléiade, «Bibliothèque de la Pléiade», Paris, Gallimard, 1981, tome 17, p.299.